

Ssession2； 私たちの中に住む一幕屋

セッション1で“安息”の意味について理解していただけたでしょうか？
神様は安息に入っておられます。神様の目的は神と人がともに住むことであると学びました。今回は、そのことを聖書の箇所から更に深く学んでいきたいと思えます。

神様は、人とともに住み、人の間を歩むことを願われています。
創世記の3章で初めて“歩く”という言葉が出て来ます。

創世記3：8

そよ風の吹くころ、彼らは、園を歩き回っておられる神である【主】の声を聞いた。それで人とその妻は、神である【主】の御顔を避けて、園の木の間に身を隠した。

「園を歩き回っておられる神とあります。神はただ単に歩き回っておられたのではなく、被造物であり、子であるアダムとエバと一緒に歩いておられました。
神は毎日この面会を楽しみに来られ、彼らと深い関係の中で過ごされていたのです。これが、神が人を造られた目的であり、神の願いは深い関係を持って人と一緒に過ごす事にありました。像や猿やキリンなどの被造物とではなかったのです。神は人とともに歩まれました。しかし、人は神の御顔を避けて隠れました。

創世記3：9

神である【主】は、人に呼びかけ、彼に言われた、「あなたはどこにいるのか。

「どこにいるのか」とはどういう意味でしょうか？ これは、場所を聞いているわけではなく、「わたしはここにいる。一緒に歩む時間だ。なぜわたしといないのか？」という意味です。神は全てを知っておられるのに、アダムとエバがどこにいるのかご存じなかったのでしょうか？ 場所を聞いているのではなく、何故一緒にいないのかを尋ねているのです。

出エジプト記25章を見てください。

出エジプト記25：8

彼らがわたしの聖所を造るなら、わたしは彼らの中に住む。

神はエジプトから民を引き出した後、聖所を作るように言われました。なぜ聖所を造らなければならなかったのでしょうか？ エデンの園で人が罪を犯す前、神はアダムとエバと一緒に自由に歩きました。けれども彼らが罪を犯した後は、清められた上で会う事が必要になりました。神と関係を持つためには、罪を贖うためのシステムが必要となりました。

では“住む”という言葉に注目してみましよう。

幕屋というのはテントです。人々が幕屋に住んでいたのも、神も人々と同じように幕屋に住むと言われました。そして荒野に神のための幕屋を設けるように言われました。山の頂上に作れと言われたのではなく、人々の中心に作るように言われました。

出エジプト記29章を見ます。

出エジプト記29：45-46

45 わたしはイスラエル人の間に住み、彼らの神となる。

46 彼らは、わたしが彼らの神、【主】であり、彼らの間に住むために、彼らをエジプトの地から導き出したことを知るようになる。わたしは彼らの神、【主】である。

神は、神の子であるイスラエル民族とともに住むことを願っておられました。

レビ記 26 章を見ます。

レビ記 26 : 11-12

11 わたしは、あなたがたの間にわたしの住まいを建てよう。わたしはあなたがたを忌み嫌わない。

12 わたしはあなたがたの間を歩もう。わたしはあなたがたの神となり、あなたがたはわたしの民となる。

ここで神はもう一度、民の間に住まいを建て、人間とともに歩むと言われました。ともに住み、ともに歩んで行くという事が強調されています。これはフェロシップです。前回、「霊とまことの礼拝

について学びましたが、この“礼拝”と“フェロシップ”は近いものがあります。

申命記 23 : 14

あなたの神、【主】が、あなたを救い出し、敵をあなたに渡すために、あなたの陣営の中を歩まれるからである。あなたの陣営は聖い。主があなたの中で醜いものを見て、あなたから離れていかなないようにしなければならない。

この様に旧約聖書の多くの箇所、**「神がともに住み、ともに歩むことが書かれています。」**

次に新約聖書を見ていきます。

マタイの福音書 1 : 23

「見よ、処女が身ごもっている。そして男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。訳すと、神は私たちとともにおられるという意味である。」

イザヤ書 7 : 14 を引用しています。イエス・キリストは「インマヌエル」と呼ばれ、「神がともにおられる」という意味です。

黙示録 21 : 3

そのとき私は、御座から大きな声がこう言うのを聞いた。「見よ、神の幕屋が人々とともにある。神は彼らとともに住み、彼らはその民となる。神ご自身が彼らとともにおられて、

創世記でも黙示録でも、神が人とともに住み、ともに歩まれる事が書かれています。もう少し深く見ていきます。

ヨハネの福音書 1 : 14

ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。この方は恵みとまことに満ちておられた。

ヨハネはこの箇所を、創世記 1 章と対比させて書いています。ヨハネの福音書 1 章 1 節で「初

めにことばがあった。ことばは神とともにあった

と書いたのは、創世記1章1節に、「初めに、神が天と地を創造した」と書かれているからです。

ヨハネは、イエス・キリストが神である事を論じるために書いています。それで「ことばが肉体をとって住まわれた」ことを、旧約聖書に出てくる“幕屋”を使って書いています。（訳注：「住まわれた」の原語は、ヘブル語でシャーカン：幕屋を張る）「私たちの間に住まわれた」を「私たちの間に幕屋を張られた(tabernacled)」と訳している英語の聖書もあります。

ヨハネは何を言おうとしたのでしょうか？ ヨハネはただ単に、イエスが来られ、弟子と一緒に住まわれたと言いたかったのではなく、「住む（幕屋を張る）

という言葉を使って、神であるイエスが彼らとともにおられると書いたのです。

ヨハネは他にも、イエスについて“光”“パン”“神の子羊”という言葉を使っていますが、これらはすべて幕屋に備えられているものです。幕屋という言葉の念頭に置いて読んでみると興味深いものがあります。

ヨハネの福音書1:14

ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。この方は恵みとまことに満ちておられた。

「私たちの間に住まわれた」「この方の栄光を見た

これはどういう意味でしょうか？ 出エジプト記40章のみことばを読むと分かります。

出エジプト記40:33-35

33 また幕屋と祭壇の周りに庭を設け、庭の門に垂れ幕を掛けた。こうしてモーセはその仕事を終えた。

——モーセは幕屋に関する仕事を終えました。

34 そのとき、雲が会見の天幕をおおい、主の栄光が幕屋に満ちた。

——幕屋を作り終え、その後、主の霊が下り、栄光が幕屋に満ちました。

35 モーセは会見の幕屋に入ることができなかった。雲がその上にとどまり、主の栄光が幕屋に満ちていたからである。

—— 神の栄光が満ちていたので、モーセは幕屋に入ることができませんでした。

ヨハネはこの箇所を念頭に置いて1章を書きました。

イエスは私たちの間に住まれ——幕屋を張られ——、私たちはこの方の栄光を見た。

1章は2章以降の要約です。ヨハネは、イエスと過ごした期間を通してイエスの栄光を見たと思います。過越しの祭りの最後の晩餐の時、ヨハネはイエスの胸元に寄りかかっていた。イエスの鼓動が聴こえたと思います。ヨハネは死んで復活されたイエスを見ました。イエスの弟子たちはイエスとともに過ごし、ともに歩み、直接の関係があり、自分の目でイエスの栄光を見ることができましたが、モーセは主の栄光を見る事ができませんでした。なぜなら、モーセと幕屋の間には、幕屋を通してしか神と人が関係を持つことができないという距離感があったからです。

ヨハネは1章で 幕屋について、また福音全体の要約を語ろうとしています。

出エジプトでは、神はモーセに幕屋を作らせ、そこに住むと言われました。神であるイエスは、人とともに住むために来られました。そしてイエスご自身が神殿でした

ヨハネの福音書2:20-21

20 ユダヤ人たちは言った、「この神殿を建てるのには、46年もかかりました。あなたはそれを3日で建てるのですか」。

21 しかし、イエスはご自分のからだという神殿について語られたのであった。

イエスはこのように目に見える神殿となりました。人は直接神を知り、目で見て、話しかけ、個人的に関係を持つことができるようになりました。それでバプテスマのヨハネは、イエスに向かって「世の罪を取り除く神の子羊」と呼びました。

ヨハネの福音書 1 : 29

その翌日、ヨハネは自分の方にイエスが来られるのを見て言った、「見よ、世の罪を取り除く神の小羊」。

神殿は3つの部分から成りたっていました。門から入るとまず祭壇があります。ヨハネはイエスを「神の子羊、世の罪を取り除く方」と呼びました。これは、出エジプトの時、イスラエルの人々が子羊を屠り、血を家の門柱とかもいに塗ったことと似ています。

ヨハネの福音書 13 : 5

それから、たらいに水を入れ、弟子たちの足を洗って、腰にまどっておられる手ぬぐいでふき始められた。

イエスは弟子たちの足を洗いました。足を洗うことには、洗盤の水で身を清めるという意味があります。祭司は聖所に入る前、まず洗盤の水で身を清めました。

ヨハネの福音書 14 : 2

わたしの父の家には、住まいがたくさんあります。もしなかったら、あなたがたに言っておいたでしょう。あなたがたのために、わたしは場所を備えに行くのです。

イエスは、「父の家にはたくさん住まいがある」と言われました。14章ではイエスを信じる信徒に対して言われたのです。イエスが戻って来たら父のもと（神がおられる場所）に連れて行くと言っています。

では、神殿の中で神がおられる場所はどこでしょうか？
至聖所です。そこには契約の箱があり、最も神聖な場所です。イエスはそこに弟子を連れて行くと言われました。しかしまず、ご自身が先に行かなければなりません。そして戻って来て私達を連れて行くのです。大祭司であるイエスが先ず、神殿のたれ幕を通して行かなければなりません。そこでイエスが十字架にかかれた時、そのたれ幕が大きく二つに裂かれたのです。

ヨハネの福音書6章には、天からのパンについて書かれています。
パンは聖所に備えられ、12個あり、12は12部族を示しています。そこにはまた、燭台があります。イエスはご自身を「世の光だ」と言われました。燭台は聖所の唯一の光であり、イエスを指します。
パンは神の言葉を指し、イエスはパンを指して「わたしが生けるパンだ」と言われました。ヨハネは「ことばが人となった」と言い、イエスはご自分を「神のことば」と言われました。イエスは「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は永遠の命が与えられる」と言われました。

この様に、ヨハネは神殿の型を利用して、イエスがどういう方であるか示したのです。

ヨハネの福音書 17 章は大祭司の祈りについて書かれています。

聖所には、香の壇があります。ヨハネの福音書 17 章 1-5 節で、イエスは自分自身について祈っています。これは大祭司の祈りにあたり、アロンの祝福やモーセの祈りに一致していると思います。

ヨハネの福音書 17 : 1-5

1 イエスはこれらのことを話してから、目を天に向けて、言われた。「父よ。時が来ました。あなたの子があなたの栄光を現すために、子の栄光を現してください。

2 それは子が、あなたからいただいたすべての者に、永遠のいのちを与えるため、あなたは、すべての人を支配する権威を子にお与えになったからです。

3 その永遠のいのちとは、彼らが唯一のまことの神であるあなたと、あなたの遣わされたイエス・キリストとを知ることです。

4 あなたがわたしに行わせるためにお与えになったわざを、わたしは成し遂げて、地上であなたの栄光を現しました。

5 今は、父よ、みそばで、わたしを栄光で輝かせてください。世界が存在する前に、ごいっしょにいて持っていましたあの栄光で輝かせてください。

イエスはこの様に自分自身について祈られました。

6 節からは弟子のために祈られました。

旧約時代、大祭司は年に一回だけ至聖所に入りました。初めに雄牛の血を携えて自分自身のために入ります。出て来て、2 回目にはイスラエル全体のためにそこに入って行きます。この関係が分かるでしょうか？ 旧約時代の大祭司が 2 回目に入る時、血と一緒に、胸に 12 個の石が入った胸当てをつけて入りました。同じように、イエスは弟子たちに対する思いを胸に秘め、そこで祈っています。

ヨハネの福音書 17 : 6-19

6 わたしは、あなたが世から取り出してわたしに下さった人々に、あなたの御名を明らかにしました。彼らはあなたのものであって、あなたは彼らをわたしに下さいました。彼らはあなたのみことばを守りました。

7 いま彼らは、あなたがわたしに下さったものはみな、あなたから出ていることを知っています。

8 それは、あなたがわたしに下さったみことばを、わたしが彼らに与えたからです。彼らはそれを受け入れ、わたしがあなたから出て来たことを確かに知り、また、あなたがわたしを遣わされたことを信じました。

9 わたしは彼らのためにお願いします。世のためにはではなく、あなたがわたしに下さった者たちのためにです。なぜなら彼らはあなたのもだからです。

10 わたしのもはみなあなたのも、あなたのもはわたしのものです。そして、わたしは彼らによって栄光を受けました。

11 わたしはもう世にいらなくなります。彼らは世におりますが、わたしはあなたのみもとにまいります。聖なる父。あなたがわたしに下さっているあなたの御名の中に、彼らを保ってください。それはわたしたちと同様に、彼らが一つとなるためです。

12 わたしは彼らといっしょにいたとき、あなたがわたしに下さっている御名の中に彼らを保ち、また守りました。彼らのうちだれも滅びた者はなく、ただ滅びの子が滅びました。それは、聖書が成就するためです。

13 わたしは今みもとにまいります。わたしは彼らの中でわたしの喜びが全うされるために、世にあってこれらのことを話しているのです。

14 わたしは彼らにあなたのみことばを与えました。しかし、世は彼らを憎みました。わたしが

この世のものでないように、彼らもこの世のものでないからです。

15 彼らをこの世から取り去ってくださるようというのではなく、悪い者から守ってくださるようお願いします。

16 わたしがこの世のものでないように、彼らもこの世のものではありません。

17 真理によって彼らを聖め別ってください。あなたのみことばは真理です。

18 あなたがわたしを世に遣わされたように、わたしも彼らを世に遣わしました。

19 わたしは、彼らのため、わたし自身を聖め別ちます。彼ら自身も真理によって聖め別たれるためです。

20 節以降は、これから信じる多くの人々のための祈り、私達のための祈りです。

ヨハネの福音書 17：20-26

20 わたしは、ただこの人々のためだけでなく、彼らのことばによってわたしを信じる人々のためにもお願いします。

21 それは、父よ、あなたがわたしにおられ、わたしがあなたにるように、彼らがみな一つとなるためです。また、彼らもわたしたちにおられるようになるためです。そのことによって、あなたがわたしを遣わされたことを、世が信じるためなのです。

22 またわたしは、あなたがわたしに下さった栄光を、彼らに与えました。それは、わたしたちが一つであるように、彼らも一つであるためです。

23 わたしは彼らにおり、あなたはわたしにおられます。それは、彼らが全うされて一つとなるためです。それは、あなたがわたしを遣わされたことと、あなたがわたしを愛されたように彼らをも愛されたこととを、この世が知るためです。

24 父よ。お願いします。あなたがわたしに下さったものをわたしのいる所にわたしといっしょにおらせてください。あなたがわたしを世の始まる前から愛しておられたためにわたしに下さったわたしの栄光を、彼らが見るようになるためです。

25 正しい父よ。この世はあなたを知りません。しかし、わたしはあなたを知っています。また、この人々は、あなたがわたしを遣わされたことを知りました。

26 そして、わたしは彼らにあなたの御名を知らせました。また、これからも知らせます。それは、あなたがわたしを愛して下さったその愛が彼らの中にあり、またわたしが彼らの中にいるためです。」

質問します。神はどれ程私たちが愛しているのでしょうか？ 答はイエスと同じ位です。困難な時には思い出してください。

「父よ、・・・ 彼らの中にいるためです（1～26 節）。

これが大祭司の祈りです。

ヨハネは幕屋を使って、私達に神の意向、ゴール、人生の意味などを説明しました。

ヨハネの福音書 1：14

ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。この方は恵みとまことに満ちておられた。

イエスは「人となって、私たちの間に住まわれた

とあります。神が下って来られただけでなく、人とともに歩まれるようになりました。人が神と関係を持つことができるようになり、神のもとに近づけるようになった事を示しています。創世記で神がアダムとエバとともにおられたように、イエスが弟子とともに歩み始められました。

聖所の中には香の壇があり、大祭司が入って来て香を焚きます。その香の煙が至聖所の中にも入って行きます。香のように、イエスの祈りがその部屋全体に響きました。

ユダヤ教のラビの教えについて少し話します。ラビによると、幕屋の外庭の門は “道” と言われます。外庭と聖所を分ける門は “真実” と言われます。そして聖所と至聖所を分ける内幕は、“生命” と言われます。「道、真実、生命。

ヨハネの福音書 14 : 6

イエスは彼に言われた、「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。

ヨハネは幕屋を通して福音全体を伝えていました。
イエスは、自分は道であると言われました。真理の道であり、いのちに至る道です。

エジプトでイスラエルの民はどのようにして救われたのでしょうか？

最初、家の門には羊の血が塗られました。この門を通して彼らの旅が始まりました。その後紅海を渡りましたが、これが第2の門に当たります。第3の門があり、これがヨルダン川です。この様に、約束の地に入るために、羊の血の門から入ったのです。こうして旅が始まりました。目的は荒野に留まる事ではなく、約束の地に入ることでした。

では、約束の地では何をするのでしょうか？ 脚を伸ばして休んでいるのではなく、旅を終え、神とともに安息の中で生きるのです。

この世の人生においても、安息に入って神とともに過ごす事が大切です。これは死んだ後の話ではなく、神とともに歩む今日が大切であると言えます。

私達は誤解をしてしまいがちです。人間側から神に熱心に祈り、神を近くに感じて生きたいと思うのですが、よく聖書を読むと、神の方から人とともに住みたいと願っておられます。神はエデンの園の時から、そのために備えてこられたのです。

このように、ともに住まうこと、ともに歩むこと、安息、安息日には、深い意味があります。神は「わたしとともに来なさい。ともに住み、ともに歩みなさい」と言われました。

クリスチャンの多くが子羊の門を通り、門のそば、すぐ外に出られる所にいるかもしれませんが。また、紅海の手前にいるかもしれません。イエスは「動きなさい、わたしは道であるから、わたしとともに来なさい」と言われたのです。

荒野の40年を通し、民は、神が誠実なお方であること、真理であることを知りました。そして約束の地に入ると「いのちの木」があります。「約束の地」は「いのちの木」を象徴しています。神は安息年を設けられました。働かない年でも「いのちは神から来るものだから、神に信頼しなさい」と教えるためでした。これが「いのちの木」の本質なのです。